

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者 大西 浩

大町高等学校

大町高校夏合宿・・・④ 立山山頂で歌う山岳部歌

(4日目:雷鳥平-真砂岳-富士の折立-大汝山-雄山-の越-東-の越-黒部平-黒部ダム-扇R)

今日も北の高気圧の勢力圏にあるのだろうか、比較的涼しく、さわやかな夜明けである。昨日無理して建てたポールなしテントも無事一晚持ったようだ。こちらは、朝から炊き込みご飯に乾燥野菜の味噌汁の食事。4時半、ゆったりした気分でコーヒーを飲んでいっているうちに、もう醤油ご飯のいい匂いがしてきた。5時半の出発に向けて余念がない。山行も4日目を迎えるとテント生活においてもそれぞれがそれぞれの分担をうまくこなしながら、テントごとでのチームワークもできあがってくる。初日水難騒ぎでどうなることかと先行きが案じられたが、そんな心配は杞憂だった。昨日の入浴も生徒には大きなアドバンテージとなった。昨日のテントファミリーには悪いが、こちら先を急ぐ事情がある。出発に合わせ、起きてもらい、ロープ等を回収させてもらった。「おかげでゆっくり眠れました。」と聞いて一安心。このファミリーのことは今後他山の石として自分たちも肝に銘じよう。今年のIHでも、テント本体を丸ごと忘れたというチームや、ポールを一部忘れたというチームが現実にあった。また、今回我が山岳部のガスヘッドのネジが外れて分解してしまったということもあった。・・・そんなことも考え合わせるとき、まずは出発前の装備確認と点検の重要性を生徒に知らしめるのはとても勉強になったし、万が一忘れた場合の対応としての登山者としての工夫や知恵についても考えるいい機会となった。

予定通り5:30に、朝の清々しい冷気を感じながら大走りを真砂に向けて歩き出す。鉢の底から真砂までの標高差はおおよそ600m。いよいよ4日間の縦走もフィナーレが近い。登り詰めた稜線の分岐に荷物をおいて真砂まで空身で登る。この真砂からの剣と後立山の景色は圧巻だった。YとKの二人はこの景色を今回一番の感動した景色だったと下山後のミーティングで述懐している。右に傾いた白馬から連なる後立山の峰々が立山連峰と対峙してみじんも引けをとらずに凜とそびえる姿は、生徒にとっておらが山の素晴らしさを再認識させてくれたことだろう。

コルから富士の折立を経て大汝に至る。初めて3000mを超えた生徒は感慨深げである。山高きが故に尊からず、されど3000mを越すというのは、一つのトピックである。今回の最高峰大汝では幸いなことに一時的に山頂を独り占めする贅沢までも味わった。3000mで歌う「山岳部歌」。その一節(3番)には「昨日立山、今日は白馬、明日は蓮華の峰に立つ」とある。現実の登山で可能であるか否かは問題ではない。今その立山から白馬、蓮華を一望しながら、



真砂岳にて



大汝山にて

次の山行に向けて思いをこれらの山に馳せるたくましい生徒たちの今この時が重要なのだ。

雄山の山頂から、一の越への下りは人の多さに難渋し、予想外に時間を食ってしまった。お盆最終日の日曜ともなれば、それも仕方のないことかもしれない。頂上で一緒になった岡山の山岳ガイドであるMさんという方と話しながら下った。若者たちの登山する姿を見て、何か感じてくださったのだろう。わずかの間ではあったが、中国四国の山事情をうかがいながらのひと時だった。



大岩帯の一の越への下り

来年のIHは岡山である。何かの機会にお世話になることがあるかもしれない。

落石が心配だったが、10:00 一の越まで降りて一安心。しかし、この先、長い下りが待っている。雪のある時期ならスキーで一滑りであるが、今日はそういうわけには行かない。ここで大休止をして一息入れる。東一の越への道に入るととたんに人並みは途切れさっきまでの喧騒とは全く異なる世界となった。今回、初日、2日目の針ノ木古道と最終日のタンボ沢の下りはほとんど人の入っていないルートであり、静かな山歩きを楽しめた。お花畑の花を愛でながら東一の越に着いたのは、11:00。ここからの道はほとんど整備がされておらず、時には高い草丈の藪を漕ぎながらの下山となった。文明の利器たるロープウェイを脇に見ながらでは、歩いても士気は上がるはずもない。勢い登山者は少ない。だが、やはり最低限の保守点検をして、登山道は残してほしいものだ。

下るにつれ暑さも増し、蓄積した疲労で困憊した身体に追い打ちをかける。そんな身体に黒部湖が遠い。何しろ今日一日で標高差730mを登ったあと1565mの下り、そして12.5kmの距離である。終止先頭を歩く部長のYが1年生を気遣う。足には豆ができ、体力はもう使い果たして、気力だけでついていくT女。2日目に足を攣ってからその痛みがひかない小柄なK男。靴擦れで初日からテーピングしているM女。終止無口で黙ってついていくI男。黒部平を過ぎたところで一本取る。もう声も出ず、こちらの問いかけにも空返事だけのT女を励ますと逆にそれを感じたのか、目に涙を浮かべて「済みません。」という。「何が済みませんなものか、よく頑張っているよ。」と言ってみるが、こちらの方が辛くなる。もうあとわずか頑張れ、わかっているも迂闊にはそうとは口に出せず、地図で現在地を確認させるのがやっとだ。「さあ最後の一本、休んでいては着かないぞ。」と重い腰をあげた。みんなで励まし合ったり、笑わせようと道化を演じたりするが、会話は弾まない。しかし、やがて、木の間越しにダム湖が見えてくると、安堵の空気が一気に広がり、心なしか足取りも軽くなった。

実働9時間、14:30に黒部ダム到着。みんなで食べた安着祝いのソフトクリームの美味かったこと。15:05発のトロリーバスで20分、扇沢に着いた。下山口の扇沢からは18km、30分で学校に到着。さっきまで3000mにいたのに、16:30にはテントを干し終わり、コッヘルも洗って、ミーティング。日焼けした生徒のたくましさを増した顔。まさに北アルプスは我らの庭だ。まぶしい太陽の沈まんとする先に、一昨日は朝日の昇ってきた鹿島槍が輝いていた。・・・あれから、10日。楽しかった思い出は言うまでもなく、あんなに苦しかった部分も素晴らしき思い出にと昇華し、生徒たちは写真を見ながら、山行を振り返り、次の山に向けて気持ちも新たに話をしている。僕もいい思い出を作らせてもらった。これこそまさに教師冥利に尽きるってやつです。